ZOSHIGAYA MISSIONARY HOUSE MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第 63 号　　2019 年 3 月 22 日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5　TEL/FAX　03−3985−4081

オータムコンサートを開催しました

雑司が谷旧宣教師館には、ウェスターン・ピアノというピアノがあります。約 80 年前に、欧米並みの品質を目指してつくられた国産のピアノです。当館は、このピアノを使用したコンサートを毎年開催しており、毎回、様々な楽器の組み合わせをお楽しみいただいています。

10 月 14 日に行われたオータム・コンサートは、フルートに保坂真弓さんを、ピアノに伊藤陽子さんをお迎えし、アンコールを含む 11 曲を演奏していただきました。バッハの「フルートソナタ　ト短調」などクラシックからはじまり、「七つの子」、「赤とんぼ」、「"小さい秋見つけた" による変奏曲」など、秋らしい曲が演奏され、しみじみとした味わいを感じられるコンサートになりました。

▲左より、フルートの保坂真弓さんとピアノの伊藤陽子さん

▲アンコール曲を演奏中の様子

▲トーク中の様子

▲当館のウェスターン・ピアノの調律を担当する、調律師の十二所先生。

雑司が谷旧宣教師館の細部に目を向ける

秋の歴史文化講座　報告

昨年度に引き続き、今年度も専門家を講師にお招きし、10 月 28 日と 11 月 11 日に歴史文化講座を実施しました。

2017 年度は雑司が谷地域に関する講座でしたが（「旧宣教師館だより第 60・61 合併号」をご覧ください）、今年度は「雑司が谷旧宣教師館の細部に目を向ける」をテーマに、建築の金具である「建具金物」と暖炉を彩る「タイル」に注目、技術的に建物を支えるものと装飾的に建物を彩るものを取り上げました。

今回は、まず当館の「建具金物」と「タイル」がどういったものであるかに触れつつ、ご講演の要旨に触れたいと思います。

雑司が谷旧宣教師館の建具金物

旧宣教師館には、上げ下げ窓、と呼ばれる縦に長い窓がいくつもあります。内部に重りつきの仕掛けがあり、開けた時にどの位置でも止まる仕組みの窓です。

次に錠前ですが、当館では「レバータンブラー錠」、「ピンタンブラー錠（シリンダー錠とも）」の 2 種類が使われています。「鍵穴の内部にある障害物を、鍵を入れ回すことで解除する」ことは共通していますが、後から発明されたピンタンブラー錠の方が、障害物が多く、安全性の高い錠です。また、この錠前をドアに取り付けるネジの頭がプラスかマイナスかで、「古い錠前がそのまま使われているか、途中で交換したか」がわかります。その理由は、1935 年プラスネジがアメリカで製造され、日本では戦後にマイナスネジからプラスネジが使用されるようになったからです。当館においてはこの2つが混在しており、建てられた当時から使用されている錠前と、後から変更した錠前がある、ということになります。

そして、引き違い戸に使われる錠にネジ締り式の錠があります。最近ではあまり見なくなりましたが、当館には主に「完全」と書かれた浮谷工業製と「ベスト」と書かれた BEST 製の 2 種類があります。

◀▲左より、上げ下げ窓の内部重りの交換中の様子（写真中央に細長い重りがあります）、マイナスネジとプラスネジでそれぞれ取り付けられたドアノブ、「ベスト」と「完全」のネジ締り式の錠。

雑司が谷旧宣教師館のタイル

宣教師の住居として、シンプルな作りをしている当館の中でもっとも華やかな装飾は、1 階居間にある暖炉に嵌（は）められたヴィクトリアン・タイルです。1 辺が約 15 センチ、焚（たき）口の両脇に 4 枚ずつ、計 8 枚あります。深緑の地に鮮やかな黄色とピンクで、意匠化された花（恐らく蘭）がデザインされており、暖炉まわりのケヤキ材の彫刻と共に部屋のアクセントになっています。ヴィクトリアン・タイルは 19 世紀にイギリスで制作されていたタイルで、技法やデザインともに多種多様ではありますが、当館のタイルは特に当時流行していた装飾様式「アール・ヌーヴォー」の影響がみられます。

左から、暖炉全体とヴィクトリアン・タイル。▶

・講演の要旨

「建具金物から見た旧宣教師館」（伝統技法研究会・角野茂勝先生）

古民家等の再生設計、および再生のための調査などを行い、雑司が谷旧宣教師館が 5 年に 1 度行う修復工事についても深く携わっていただいている角野先生には、旧宣教師館の建具金物について、日本にある他の洋館と比較しながら、お話していただきました。

日本における洋館の最初期の建築「旧グラバー邸（1859 年）」から歴史をたどると、素材の変化や、あるいは構造に関しても、当初はベランダだった部分が、風雨に耐えるための窓や壁が付きサンルーム化していくなど、日本の洋館は気候や風土に合わせた造りに変化していったことがわかります。

このような外観上の特徴のほかに、洋館に使われる金物も少しずつ変化していきました。錠前に関しては、錠の形や仕組みなどがより複雑に変化していったことや、錠前を取り付けるねじの頭がマイナスからプラスに変化していくなどしていきました。最後に、旧宣教師館南面の窓（ガラスの引き違い戸）のネジ締り式錠について話がおよび、建設時には、この金物はまだ発明されていなかった可能性が高く、江戸時代の引き違い板戸（舞良戸（まいらど）等）には「くるる」（引き戸の横桟につけた金具を動かして施錠する錠）が使われていたことに触れ、引き違い板戸には「くるる」が使用できたが、当館のようなガラス張りの引き違い戸だと、外から錠の位置が見えてしまい、防犯やデザインの観点から使用されなかった可能性があるので、そもそも建設時にはネジ締り錠での戸締りはしていなかったのではないか、という見通しを示されました。

◀施錠中のくるる。手前の引き棒をスライドさせることで施錠。
くるるについては、角野茂勝「歴史的建物の建築金物 -9「引違い戸の錠前」」（『伝統技法』No.37、2018 年 2 月発行）に詳細があります。

「ヴィクトリアン・タイル―旧宣教師館を彩る装飾」（美術史家・志水圭歩先生）

19 世紀の陶磁器や産業芸術、装飾芸術をご専門とし、地域的にはフランスに軸足を置きつつ、他国との比較研究などにも関心がある志水先生には、「陶磁器としてのタイル」という視点からお話をしていただきました。

タイルというと、非常に身近なものとしては床のタイルなどがありますが、内装の一つとして、あるいは、ストーブの表装にも使用されるなど、装飾としての一面もあります。講演のメインテーマである 19 世紀の装飾タイルの背景には、イギリスにおける産業振興の高まりがありました。ヴィクトリアン・タイルは、技術革新による大量生産でこの流れに応え、例えば、よく知られるミントンやウェッジウッドなども、ヴィクトリアン・タイルを制作・販売しました。その一方で、過度な工業化への反動で、手仕事によるヴィクトリアン・タイルも作られました。こうして、同時代に限らない、多種多様な地域、時代のデザインを纏（まと）ったヴィクトリアン・タイルは、当時の社会に浸透し、人々に親しまれていったのです。

▲左から、角野先生のご講演中の様子、志水先生のご講演中の様子です。スライドを使用し、たくさんの写真・資料をご紹介してくださいました。終了後、講演で解説された金物やタイルを確認するために館内をじっくりご覧になる参加者の方もいました。

旧宣教師館イベント報告

大正時代に、児童文学の質の低さを嘆いた鈴木三重吉によって発行された児童雑誌・『赤い鳥』。実はこの雑誌は現在の豊島区目白で刊行されました。当館は豊島区の施設として、またマッケーレブが幼児教育に携わっていたこともあり、『赤い鳥』の復刻版を全巻閲覧できます。

旧宣教師館では、第一土曜日に詩人の小森香子さんをお招きし、「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会」を開催しています。小森さんは幼少時から『赤い鳥』をはじめとした児童文学に親しんでこられたこともあり、15年ほど前から『赤い鳥』の読み聞かせを開始し、2019年の4月で第185回を迎えます。

今年度の演目は下記のとおりです。小川未明や鈴木三重吉、新美南吉らの作品をお楽しみください。

4月6日　小川未明「春風と王さま」、丹野てい子「桃色リボン」
5月11日　小川未明「野ばら」、相馬泰三「薬草のあるところ」
6月1日　小川未明「三つの鍵」、宮原晃一郎「漁師の大冒険」
7月6日　小川未明「海のまぼろし」、水木京太「ガンジス河へ」
8月3日　小川未明「金の輪」、鈴木三重吉「猿の手」
9月7日　小川未明「ある男と牛の話」、豊島與志雄「狸のお祭り」
10月5日　小川未明「赤い実」、江口渙「薬缶熊」
11月2日　小川未明「鼠とバケツの話」、新美南吉「ごん狐」
12月7日　小川未明「頭を下げなかった少年」、宇野千代「赤い蕎麦」
1月4日　小川未明「ヒョウ、ヒョウ、てりうそ」、水島爾保布「空へ飛んで行った牛」
2月1日　小川未明「片田舎にあった話」、下村千秋「鬼退治」
3月7日　小川未明「笑わなかった少年」、吉田絃二郎「梟と幸吉」

（演目が変更となる場合がございます。）

▲表紙や挿絵も見どころの『赤い鳥』

▲朗読中の小森香子さん

［執筆・編集　小山勝美（学芸研究員）］